

忠義者のヨハネス

グリム Grimm

矢崎源九郎訳

青空文庫

むかし、あるところに、年よりの王さまがおりました。王さまは病びよう氣きで、もう、この寢ね床じこが、どうやらじぶんの臨りん終じゆうの床とこになるらしい、と思おもっていました。

そこで王さまは、

「忠ちゆう義ぎ者もののヨハネスをよんでまいれ。」

と、おそばのものにいいつけました。

忠ちゆう義ぎ者もののヨハネスというのは、王さまのいちばんお氣けにいりの家け来らいでした。この男おとこは、
 一いっ生しょうのあいだ、ずっと王さまに忠ちゆう義ぎをつくしてつかえてきましたので、こんなふうによばれていたのです。

ヨハネスがまくらもとへきますと、王さまはいいました。

「またとない忠ちゆう義ぎ者もののヨハネスよ、いよいよわしのさいごのときがちかづいたような氣きがする。ついては、これといって心しん配ぱいになることもないが、ただむすこのことだけが氣きがかりなのじゃ。あれは、まだ年もゆかないので、どうしてよいかわからぬこともあろう。ひとつ、おまえが親おやがわりになって、なにかにつけて、あれの知らなければならぬことをおしえてやってはくれまいか。さもないと、わしは安あん心しんして目めをつぶることができな

いのじや。」

これをきいて、忠義者のヨハネスはこたえました。

「かならず、王子さまを見するようなことはいたしませぬ。わたくしの命にかけましても、きつと忠義をつくしておつかえもうします。」

すると、年よりの王さまはいいました。

「それをきいて、わしも安心して、やすらかに死んでゆける。」

それから、さらにことばをつづけて、

「わしが死んだら、王子に城のなかをすっかり見せてやってくれ。へやも、広間も、穴ぐらも、またそこにある宝ものも、のこらず見せてやってもらいたい。だが、長い廊下のいちばんおくのへやだけは見せてやってはくれるな。あのなかには、金のお城の王女の絵がしまつてあるのだ。もしも王子が、その絵姿をひと目でも見れば、たちまちその王女へのはげしい愛を心に感じて、気をうしなつて、たおれてしまうだろう。そしてその王女のために、おそろしい災難にあうことになるう。だから、そういうことのないように、よく気をつけてやってもらいたい。」

そこで、忠義者のヨハネスは、もういちど年とつた王さまの手をにぎって、かならず

そうすると約束やくそくしました。すると、王さまはそれきりものもいわず、頭をまくらにのせて、そのままなくなってしまうました。

年よりの王さまがお墓はかにはこぼれてしまつてから、忠義者ちゆうぎもののヨハネスはわかい王さまにむかつて、じぶんがまえの王さまのおなくなりになるときにお約束やくそくしたことを話して、「お約束は、かならずおまもりいたします。そして、お父ちちうえ上さまにたいするのとおなじように、あなたさまにも、命いのちをなげだして、忠義ちゆうぎをはげみたいとぞんじます。」と、もうしました。

やがて、喪もがあけたとき、忠義者のヨハネスはわかい王さまにいいました。

「さて、いよいよ、あなたさまのおうけつぎになつた財産ざいさんをごらんになるときがまいりました。お父ちちうえ上さまのお城しろをご案内あんないいたしましょう。」

それから、ヨハネスはお城じゆうの階段かいたんをのぼつたりおりたりして、わかい王さまを案内してまわりました。そして、宝たからものも、りっぱなへやも、ひとつのこらず見せました。ただ、あの危険きけんな絵えす姿すがたのあるへやだけはあけませんでした。

ところでその絵は、扉とびらをあけますと、まっすぐまえに見えるような場所ばしょにおいてありました。その絵姿は、まことにみごとにできていて、それこそほんとうに生きているのでは

なかるうかと、しかも、これいじようかわいらしい、美しいすがたは世界じゆうさがしてもあるまい、と思われるほどだったのです。

ところがわかい王さまは、この扉のところだけは、忠義者のヨハネスがいつもずおりしてしまうのに気がつきました。そして、

「どうしてこの扉はあけてくれないのかね？」
と、たずねました。

「そのなかには、あなたさまにとっておそろしいものがはいつているからでございませう。と、ヨハネスはこたえました。

けれども、王さまはいいました。

「わたしはお城のなかをのこらず見てしまった。だから、こんどは、このなかにどんなものがあるか、知っておきたい。」

こういうと、わかい王さまはその扉のところへいつて、むりやりに扉をあけようとした。忠義者のヨハネスはそれをおしとどめて、もうしました。

「わたくしは、このへやのなかにあるものを、けつしてあなたさまにお見せしないと、お父上さまにお約束したのだから、もしこの扉をおあけになりますと、あなたさ

まにも、わたくしにも、たいへんなわざわいがふりかかってまいりましょう。」

「いや、いや。」

と、わかい王さまはこたえていいました。

「もしこのへやへはいることができなければ、おそらく、わたしはだめになってしまいうだろう。この目でそれを見ないうちは、夜も昼も心のおちつくことはあるまい。おまえがあげてくれるまで、わたしはこの場を一步もうごかぬぞ。」

さすがの忠義者のヨハネスも、こうなつては、もうどうにもならないと思いました。

そこで、おもおもしろい心で、ふかいたため息をつきつき、大きなかぎたばからその扉のかぎをさがしました。そして扉をあけると、まずじぶんがさきにはいりました。ヨハネスとしては、じぶんがその絵のまえに立つて、王さまに見えないようにしようと思つたのです。でも、そんなことがなんになりましょう。王さまはつまさき立つて、ヨハネスの肩にしにその絵を見てしまったのです。しかも、金と宝石にひかりかがやく、世にも美しいおとめの絵姿を見たおとんに、王さまは氣をうしなつて、ぱったりとその場にたおれてしまったのです。忠義者のヨハネスは、あわてて王さまをだきおこして、ベッドにつれていきました。しかし、

（ああ、たいへんなことになってしまった。これから、いったいどうなるのだろう。）
と、思いますと、心配で心配でたまりませんでした。

とにかく、ヨハネスは王さまにブドウ酒をのませて、元気をつけました。すると、王さまはようやくわれにかえりましたが、なによりもさきに、

「ああ、あの美しい絵姿のひとはだれだ。」
と、たずねました。

「あのかたは、金のお城の王女でございます。」
と、忠義者のヨハネスはこたえました。

すると、王さまはまたいいました。

「あのひとをしたうわたしの気持ちには、かりに木ぎの葉がのこらず舌であつても、とうていいいつくすことができないほどのだ。わたしは一生をかけても、あのひとをじぶんのものになりたい。おまえは忠節ならぶもののないヨハネスだ。かならず、わたしをたすけてくれるだろうね。」

この忠義な家来は、いったいこれはどうしたらいいものだろうと、長いこと考えこみました。なぜって、王女のまえにでることだけでも、とつてもむずかしいことなのです。

から。ヨハネスは、やつとのことである方法ほうほうを思いついて、王さまにもうしました。

「あの王女の身みのまわりにありますものは、テーブルでも、いすでも、おさらでも、さか
ずきでも、おわんでも、そのほかすべての家具かぐらひ類いがぜんぶ、金きんでできております。ところ
で、あなたさまの宝たからもののなかには、五トンの金きんがごぎいます。そのなかの一トンを、国
じゅうの金細工師きんざいしにおいつけになって、いろいろなうつわや、道具どうぐや、またありとあら
ゆる種類しゆるいの鳥や、けものや、めずらしい動物のかたちにしらせるようになさいます。
そうすれば、きつと王女のお気にめしましょう。わたくしどもは、それをもって、船ふねにの
つてまいり、運うんだめしをすることにいたしました。」

そこで、王さまは金細工師きんざいしという金細工師を、ひとりのこらずよびあつめさせました。
金細工師たちは夜も昼もはたらきつづけて、とうとう、世よにもみごとな品しなじなをつくりあ
げました。

その品物をすっかり船につみおえたところで、忠義者ちゆうぎもののヨハネスは商しょうにん人の身なり
をしました。王さまも、身み分ぶんを知られないようにするため、おなじ身なりをしました。そ
れから、ふたりは海をわたって、長いながい旅たびをつづけました。そうして、やつとのこと
で金きんのお城しろの王女おうじよの住んでいる都みやこにつきました。

忠義者のヨハネスは、王さまに、

「船ふねにのこつて待つていてください。」

と、おねがいました。そして、

「もしかすると、王女おうじよを船におつれするかもしれません。ですから、なにもかもきれいにかたづけて、金きんのうつわをならべさせ、船もりっぱにかざりつけるようにさせておいてくださいませ。」

と、いいました。

それからヨハネスは、まえかけのなかに金で細工さいくしたいろいろの品物しなものをつつんで、陸りくにあがりました。そして、まっすぐ王女のお城しろへむかっていきました。ヨハネスがお城の庭にわにはいりますと、井戸いどのそばにひとりの美しいむすめが立っていました。むすめは手にふたつの金の手おけをもつて、それで水をくんでいました。むすめはきらきらひかる水をはこんでいこうとして、なにげなくうしろをふりむきました。と、そこに知らない男が立っていました。

「どなたですか。」

と、たずねました。



すると、ヨハネスは、

「わたくしは商人しょうにんでございます。」

と、こたえながら、まえかけをひろげて、なかを見せました。

とたんに、むすめは思わず大きな声をあげて、

「まあ、なんてきれいな金細工品きんさいくひんでしょう。」

と、いいました。そして、手おけを下において、ひとつひとつの品しなを、穴あなのあくほど見つめました。それから、

「これはぜひ王女おうじよさまにおめにかかけましょう。王女さまは金細工品がとってもおすきですから、きつと、みんな買いあげてくださいますよ。」

むすめはこういつて、ヨハネスの手をとり、お城しろのなかへ案内あんないしていききました。このむすめは、王女のおつきの侍女じじよだったのです。

王女おうじよは品物しなものを見ますと、それはそれはよろこんで、

「とてもきれいでできていますこと。みんな買いつてあげましょう。」
と、もうしました。

けれども、忠義者ちゆうぎもののヨハネスはいいました。

「じつは、わたくしは、ある金持ちかねもちの商しょう人にんの番頭ばんとうにすぎないのでございます。わたくしがここにもってまいりましたものなどは、主人しゅじんが船ふねにおいてありますものにくらべますと、まったくとるにたらないものばかりでございます。船ふねにありますものは、金細きんざい工品くひんといたしましては、もっともじょうずにできておりまして、またと手にいれることのできない、りっぱなものばかりでございます。」

王女はその金細工品をみんなもつてくるようにとのぞみましたが、ヨハネスは、「そういたしますには、ずいぶん日にちがかかります。それに、たいへんな品数しなかずでございますから、ならべるだけでもたくさんのおへやがいりまして、こちらさまのお城しろでもそれだけの場所ばしょはございません。」

と、もうしました。

この話で、王女のめずらしいものを見たい、それを手にいれたいと思う気持ちは、ますますあおりたてられました。そしてとうとう、王女はこういいました。

「では、あたしを船まで案内あんないしておくれ。じぶんでいって、おまえの主人たからの宝ものを見せてもらうことにしましょう。」

そこで、忠義者ちゅうぎもののヨハネスは王女おうじよを船ふねに案内あんないして、たいへんよろこんでいました。

王さまは王女を見ますと、あの絵にかかっているすがたよりもはるかに美しいかたなので、いまにも胸むねがはりさけそうな思いでした。

さて、王女が船にのりこみますと、王さまがなかへ案内しました。いつぼう、忠義者のヨハネスは舵取りのところのこつていて、船を陸りくからはなすようにいいつけました。

「帆ほという帆をみんなはつて、空とぶ鳥のように走らせるのだ。」

船のなかでは、王さまが金の道具どうぐをひとつひとつ、王女に見せていました。おさらだの、さかずきだの、おわんだの、さては、鳥や、けものや、ふしぎな動物などを。王女がそれらをひとつのこらず見ているあいだに、何時間も何時間もたつてしまいました。けれども、ながめるのにむちゆうになつていた王女は、船が走っているのはすこしも気がつかなくなつたのです。いよいよ、いちばんおしまいしなの品を見おわたとき、王女は商しょう人にんにお礼れいをいって、かえろうとしました。ところが、船ふなべりへでてみますと、なんということでしょう。船は陸地りくちを遠くはなれて、ひろいひろい海のまっただなかを、帆ほをいっばいにふくらませて走っているではありませんか。

「ああ！」

と、王女はびっくりしてさけびました。

「あたしはだまされたのだ。あたしはさらわれて、商人の手に落ちてしまったのだ。これなら、いつそ死んでしまったほうがいい。」

けれども、王さまは王女の手をとって、いいました。

「わたしは商人ではなく、じつは、王なのです。あなたにおとらぬ生まれのものです。あなたを、はかりごとでつれだしたのも、あなたをおしたいするあまりにやったことなのです。あなたの絵姿をはじめに見ましたとき、わたしは気をうしなつてたおれたほどのようなのです。」

金のお城の王女は、これをきいて、ようやく安心しました。そして、王さまがすきになり、お妃さまになることをよろこんで承知しました。

さて、船の人たちが大海の上をすすんでいるときのことでした。忠義者のヨハネスが船のへさきにすわって、音楽をかなでていますと、三羽の鳥が空をとんでくるのが見えました。そこで、ヨハネスはひく手をやすめて、鳥たちの話に耳をかたむけました。だって、ヨハネスには鳥たちのことばがわかるのですからね。

一羽の鳥がさげびました。

「やあ、あいつ、金のお城の王女さまをつれてかえるぜ。」

「そうだな。」

と、二ばんめのがこたえました。

「だが、王女さまは、まだあいつのものじゃないさ。」

すると、三ばんめのがいました。

「だって、あいつのものじゃないか。船ふねのなかに、ふたりでならんですわっているもの。」

すると、さいしよの鳥がまた口をだして、さげびたてました。

「そんなことは、なんにもなりやあしない。いいか、あいつらが陸りくにつくとだ、キツネ色の馬が一ぴきとんでくる。すると、王さまはそれにとびのろうとする。ところが、のろう

もんなら、馬のやつは王さまをのつけたまま走りだして、空中にかけのぼるのさ。で、王さまは二度とふたたびあのむすめにはあえないってわけよ。」

「たすかる方法ほうほうはないのかい？」

と、二ばんめのがいいました。

「あるとも。だれかほかのものがすばやくその馬にとびのるんだ。そして、くらのわきについている鉄砲てつぱうをとって、そいつで馬をうち殺ころせば、わかい王さまはたすかるのさ。だけど、そんなことは、だれも知りやあしない。それに、知っていたって、それを王さまに



いおうものなら、そいつはひざごぞうから足のつまさきまで石になっちまうんだ。」

そのとき、二ばんめの鳥がいいだしました。

「おれはもつと知ってるぞ。たとえその馬が殺されたって、わかい王さまは花よめをひきとめておくわけにやいかないんだ。あのふたりがそろってお城につくと、仕立てあがった婚礼用のシャツが鉢のなかにおいてある。そいつは、ちよつと見たところでは、金と銀とで織つてあるみたいだが、ほんとうはイオウとチャン（コールドールなどを精製したときのこる黒かつ色のかす）とできていているんだ。もしも王さまがそれをきょうものなら、王さまのからだは骨のずいまで焼けただれちまうのさ。」

「で、たすかる方法はないのかい？」

と、三ばんめの鳥がいました。

「そりやあ、あるさ。」

と、二ばんめのはこたえました。

「だれかが手ぶくろでそのシャツをつかむんだ。そして、火のなかにほうりこんで、もやしちまえば、わかい王さまはたすかるんだ。しかし、どうにもなりやあしないさ。それを知っていたって、王さまにいやあ、その男は心臓からひざごぞうまで、からだの半分

が石になつちまうんだからな。」

そのとき、三ぼんめの鳥がいいだしました。

「おれなんか、もつと知つてるぞ。たとえばその婚礼用のシャツが焼かれたとしたつて、まだまだあのわかい王さまは花よめをじぶんのものにしたとはいえないんだ。結婚式のあとでおどりがはじまつて、わかいお妃がおどりだと、きゆうにお妃はまっさおになつて、死んだようにぶつたおれる。そのとき、だれかがお妃をだきおこして、右の乳房から血のしずくを三てきすいとつて、それをはきださなけりや、お妃は死んでしまふんだ。しかし、だれかがこのことを知つていて、つげ口でもすれば、その男は頭のとっぺんから足のつまさきまで、からだぜんたいが石になつちまうんだ。」

鳥たちはこんなことを話しあいながら、とびさつていきました。忠義者のヨハネスには、この話がすっかりわかりました。ですから、このときからというものは、ヨハネスは口もきかなくなつて、かなしそうにしています。むりもありません。じぶんのきいたことを主人にだまつていれば、主人がふしあわせになりますし、もしそれをうちあげれば、じぶんの命をうしなわなければならぬのですもの。でも、とうとうヨハネスは、

「ご主人をおすくいしよう。たとえば、そのために、この命をうしなつても。」

と、ひとりごとをいいました。

「いよいよ、一同いちどうのものが陸りくにあがりますと、鳥のいったとおりのことがおこりました。キツネ色のりっぱな馬が一頭とう、まっしぐらにとんできました。

「ようし、あれに城しろまでのせていってもらおう。」

王さまはこういって、馬にとびのろうとしました。ところが、そのときいちはやく、忠ち義ぎ者のヨハネスは、ひらりと馬にとびのるがはやいか、くらのわきから鉄砲てっぽうをとって、いきなりその馬をうち殺ころしてしまいました。しかし、まえから忠義者のヨハネスのことをよく思っていなかったほかの家来けらいたちが、口ぐちにさわぎたてました。

「王さまをお城しろまでおのせするはずの、あんなりっぱな馬を殺すとは、ふとどきしごくのやつだ。」

けれども、王さまはいいました。

「だまって、あの男のやるとおりにさせておけ。忠義ちゆうぎこのうえもないヨハネスのことだ。それに、これがまた、なんの役やくにたつかもしれぬ。」

やがて、みんながお城しろのなかにはいりますと、広間ひろまに鉢はちがおいてあって、そのなかに仕立したてあがった婚礼用こんれいようのシャツがはいていました。ちよつと見たところでは、どうして

も金と銀とで織つてあるとしか見えません。

わかい王さまは、つかつかとそのそばにあゆみよつて、それを手にとろうとしました。ところが、忠義者のヨハネスは王さまをおしのけて、手ぶくろでそれをひつつかみ、すばやく火のなかへほうりこんで、もやしてしまいました。

それを見て、ほかの家来たちがまたぶつぶつもんくをいいはじめました。

「みろよ、あいつ、こんどは、王さまの婚禮用のシャツまでもやしているぞ。」
けれど、わかい王さまはいいました。

「これがまた、なんの役にたつかわからないのだ。あの男のするとおりにさせておけ。忠義このうえもないヨハネスのことだ。」

まもなく、ご婚礼のおいおいがありました。おどりがはじまって、花よめもそのなかにはいりました。忠義者のヨハネスはじつと気をつけて、花よめの顔ばかり見まもっていました。と、とつぜん、花よめはまつさおになつて、死んだように、床にうちたおれました。とみるや、ヨハネスはいそいでかけよつて、花よめをだきおこし、ひとつのへやにはこびいれました。そして、花よめをそこにねかしますと、じぶんはかたわらにひざまずいて、花よめの右の乳房から三てきの血をすいとつて、はきだしました。すると、たちま

ち、花よめは息をふきかえして、元氣をとりもしました。

わかい王さまは、そばからこのありさまを見ていました。けれども、忠義者のヨハネスがどうしてこんなことをするのか、わけがわからないものですから、すっかり腹をたてて、

「あの男を牢にいられてしまえ。」

と、どなりました。

そのあくる朝、忠義者のヨハネスは罪をいいわたされて、首つり台にひきだされしました。そして、高いところにあがって、いよいよおしおきをうけることになりました。そのとき、ヨハネスはいいました。

「死ぬときまりましたものは、だれでも死ぬまえに、ひとことだけいうことがゆるさされておりませう。わたくしにもそれをゆるしていただけませうか？」

「よろしい、ゆるしてつかわす。」

と、王さまはこたえました。

そこで、忠義者のヨハネスはいいました。

「わたくしは、身におぼえのない罪をいいわたされたのでございます。わたくしは、いつ

なんどきも、忠義をつくしてまいりました。」

そしてヨハネスは、海の上で鳥たちの話をきいたこと、王さまをすくうために、あしたことをどうしてもしなければならなかったこと、などをものがたりしました。

それをきいて、王さまはさげびました。

「おお、忠節ちゆうせつならばものないヨハネスよ、ゆるすぞ。ゆるすぞ。あのものを下へおろせ。」

ところが、忠義者ちゆうぎもののヨハネスは、さいごのことばをいいおわるといっしよに、息いきがたえて、ころがりおちました。ヨハネスは、もう石になっていたのです。

王さまとお妃きさいさまは、たいそうこれをかなしみました。王さまは、

「ああ、このようなりつばな忠節ちゆうせつにたいして、わたしはまた、なんというむくいかたをしたものだ。」

と、いいました。それから、その像ぞうをひきおこさせ、じぶんの寢室しんしつのベッドのそばに立てさせました。そして、それを見るたびに、王さまは涙なみだをながしていいました。

「ああ、おまえをもういちど生かしてやりたいものだ。忠節ちゆうせつならばものないヨハネスよ。」

それから、時はたつて、やがてお妃さまはふた子を生みました。ふた子は、どちらも王子うじでした。すすくと大きくなつて、いまでは、王さま、お妃さまのよろこびのたねとなりました。

ある日、お妃さまが教きょう会かいへでかけてしまつて、ふたりの子どもがおとうさまのそばであそんでいたときのことでした。王さまは、またいつものようになしい思いで石の像ぞうをながめながら、ため息いきをついて、思わず大きな声でこういつてしまいました。

「ああ、おまえを生きかえらせることができたらなあ。忠ちゆう節せつこのうえもないヨハネスよ。」

と、どうでしょう、その石が口をききはじめて、

「はい、あなたさまのいちばんだいじなものを犠牲ぎせいにしてくださいますなら、わたくしはもういちど生きかえることができます。」

と、いうではありませんか。

これをきいて、王さまはさげびました。

「わたしがこの世よにもつているものなら、なんなりとおまえのためにささげるぞ。」

すると、石はなおもことばをつづけて、

「もしもあなたさまが、ごじぶんの手でふたりのお子さまの首をはねて、その血をわたくしにぬってくださいますなら、わたくしは命をとりもどします。」

王さまは、じぶんのいちばんだいじな子どもをじぶんの手で殺さなければならぬときいたとき、思わずはつとしました。けれども、すぐに、ヨハネスのあのりっぱな忠義を思い、しかもそのヨハネスはじぶんのために死んだことを考えますと、つるぎをぬきはなつて、じぶんの手でふたりの子どもの首をはねました。そして、その血を石にぬりつけました。すると、たちまち、ヨハネスは命をとりもどして、あの忠義者のヨハネスが、むかしどおりの元気な、いきいきとしたすがたで、王さまのまえにあらわれました。

ヨハネスは、王さまにいました。

「あなたさまのこのまごころは、むくいられぬはずはございません。」

こういうと、ヨハネスは子どもたちの首をとって、胴の上にのせ、傷口に血をぬりつけました。と、みるみるうちに、子どもたちは生きかえりました。そして、まるでなごともなかつたように、元気にはねまわって、あそびつづけました。

王さまの心は、よろこびでいっぱいになりました。やがて、お妃さまがこちらへくるのを見ますと、王さまは忠義者のヨハネスとふたりの子どもを大きな戸だなのなかにかく

しました。

お妃さまがへやのなかにはいつてきますと、王さまは、

「きょうかい教会でおいのりをしたのかね？」

と、たずねました。

「はい。」

と、お妃さまはこたえました。

「でもあたしは、あのちゆうぎもの忠義者のヨハネスが、あたしたちのためにこんなふしあわせになつたことばかり、ずっと考えておりましたの。」

それをきいて、王さまがいました。

「きさぎ妃よ、わたしたちは、ヨハネスをもういちど生きかえらせてやることができるのだよ。

しかし、それにはふたりの子どもがひつよう必要なのだ。わたしたちは、あのふたりをぎせい犠牲にしななければならないのだ。」

お妃さまはまつさおになりました。心のなかでふかくおどろいたのです。けれども、

「あのりつばなちゆうぎ忠義のことを思えば、それもいたしかたございません。」

と、もうしました。

これをきいて、王さまは、お妃さまもじぶんとおなじ考えであることを知って、心からよろこびました。そこで戸だなのところへつかつかとあゆみよって、戸だなをひきあけました。そして、子どもたちとヨハネスをつれだしてきて、こういいました。

「ありがたいことだ。ヨハネスはすぐわれたぞ。子どもたちも、もとのままだ。」
そこで、王さまは、お妃さまにいままでのことをのこらず話してきかせました。

こうして、この人たちは、この世をさるまで、みんなでいっしょに、しあわせにくらしました。

青空文庫情報

底本：「グリム童話集（二）」偕成社文庫、偕成社

1980（昭和55）年6月1刷

2009（平成21）年6月49刷

※表題は底本では、「忠義者《ちゆうぎもの》のヨハネス」となっています。

入力：sogo

校正：チエコ

2019年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

忠義者のヨハネス グリム Grimm

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 矢崎源九郎訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>